



第26号

(年2回発行)

発行所
喜多流大島能楽堂
 〒720-0814
 広島県福山市光南町2-2-2
 TEL 084-923-2633
 FAX 084-923-8730
<http://www.noh-oshima.com>

ふたつの学び

喜多流シテ方 大島衣恵

教員免許更新講習で今年も日本音楽を担当させて頂きました。一日六時間の講習ですが、すぐに現場で活用して頂ける内容にしたいと毎年試行錯誤しながら取り組んでいます。

本年度受講された教員の方々からのレポートには、声を出す楽しさに改めて気づき、授業で取り入れたい、という内容のものが多くありました。学校の授業で日本音楽を扱うにも和楽器を揃える予算がない、楽器があるとしても演奏法の指導を教員では出来ない、など課題山積であることも耳にしていました。それならば、身一つで出来る謡にしっかりと取り組むことで能の根幹に触れてもらい、そこから日本音楽や伝統芸能全体へ広がる道筋を見出してもらえないだろうか、と思案しましたので大変嬉しく読ませていただきました。

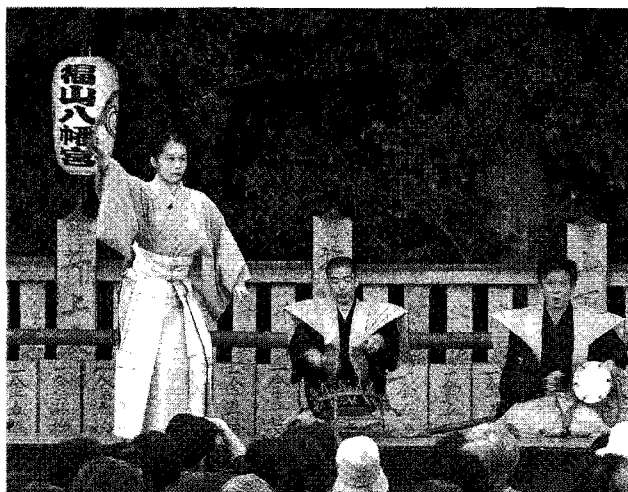
声を出すことの清々しさやウタの楽しさは洋の東西を問いません。しかし、日本人の体により合う和の発声を見直すことで、現代日本人の心身の脆さを克服しよう、と提唱されているのが、観世流能楽師山村庸子さんです。山村さんのお考えに大変共感し、お話やご著書からいつも沢山のヒントを頂いています。

その山村さんの主催される『こころみの会』にて、能「蟬丸」のシテを勤めさせていただきました。観世流女性能楽師の方々との流儀を超えた度重なる稽古や張り詰めた舞台を通して、非常に多くのことを学ばせていただきました。このような貴重な場を与えて頂いたことに深く感謝を致しております。

この度の舞台を勉強の場としてご理解とお力添えを賜りました喜多流の友枝昭世先生はじめ

P2 こころみの会に咲いた花 山村庸子
 P6 能装束ワークショップ2012 ジョン・オグルヒー
 P8 “高砂や”から“英語能ハゴダ”へ 釜 衣代

諸先生方、身に余るご指導とご配慮頂きました観世鎮之丞先生、梅若玄祥先生はじめ観世流の先生方、三役の先生方、地頭をお勤め頂いた鶴沢久先生はじめ地謡の皆様、蟬丸として共演頂いた鶴沢光さん、そして主催者の山村庸子先生、全ての皆様にご心より御礼申し上げます。



シテ大島衣恵 太鼓 前川光範 大鼓 亀井広忠 (2012.7.28) 福山八幡宮



こころみの会に咲いた花

観世流シテ方

山村庸子

やまむらようこ
山村庸子氏

観世流シテ方

昭和23年4月6日生まれ

昭和46年 慶應義塾大学商学部卒

昭和47年 福岡にて観世流シテ方鷹尾祥史師に入門

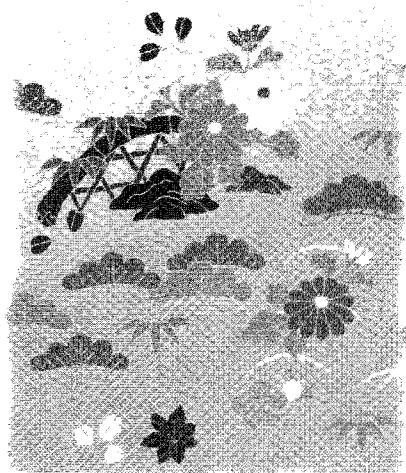
昭和53年 結婚を機に上京、梅若六郎師に師事

昭和63年 観世流師範となり、梅若会に所属

平成17年 観世流準職分となる

「隅田川」「道成寺」などを抜く

「緑桜会」主宰 「声の道場」主宰



私は現在、観世流の能楽師として活動させて頂いていますが、能の家に生まれたわけでも、子供の頃から能の稽古をしていたわけでもありません。東京の大学を卒業して福岡の実家に帰ったとき、能が大好きだった両親のお付き合いで稽古を始めたのですが、たちまち能の魅力にはまり稽古中心の生活が始まりました。好きが高じて、結婚して子育てが落ち着いた頃、四十歳の時に梅若六郎(現・玄祥)先生に師範に取り立てて頂けることになったのです。

「男性の真似をせず、女性が演じたからこそ、という能を目指しなさい」という目標を頂いていたものの、その頃は楽屋の仕事覚えるのと目の前の舞台を勤めるので精一杯でした。ただ、稽古をしたり舞台を勤めさせて頂いていたのですが、そのうちにハツと気がつきました。師匠はもつとずつと先のことを教えてくださっていたのです。

自分なりに師匠の言葉を、「基本を身につけるまでは男も女もない。まずは能を舞える身体、発声、それができて素直に演じたときに初めて、同じ曲でも男性と違った女性の魅力が出る。それも、初めから自分でそれを求めるというものではなく、お客様が感じて下さるものなのだ」と理解したのです。それからは「女性だつてと気張らず、女性だからと甘えず」と自分に言い聞かせ稽古に励んできました。その中で自分の勉強の為に何か会を始めたいと思うようになり、「こころみの会」を始めたのです。コンセプトは『女性の能を考える』『自分が観たくなる』

この二つです。

最初の頃は舞囃子や仕舞を一般の方にもわかりやすく観て頂くために、解説を入れながら、見た目が等身大になるように配役をして番組を作りました。「賀茂」の別雷の神を師匠にお願ひし、その前に舞う天女の舞を私が舞ったり、「船弁慶」の前の静を私、師匠に後の知盛を続けて舞って頂いたり…。

私は普段はまず舞うことのない着流しで舞うということもしました。女性でお稽古する方が多いこのごろ、女性ならではの着流しで舞うときに、「舞踊のようにならず能を感じられるためにはどうしたらいいか」を考えなかったのです。襟のつきかた、帯の高さ、前と後の裾のバランス、能の型がしつかりできたうえで美しい着付けがあるはずですが、能で装束の着付けが舞台を引き立てるように、素人さんが舞台で発表なさるときにはいちばん美しくみえる着付けをしてあげるのも、補整からお手伝いできる女性能楽師の大事な仕事だと思っています。自分の舞う姿を写真やビデオで観て、謡が楽に謡えて着崩れず、なおかつ線の美しい着付けを研究し、舞台に臨みました。

能の装束に合わせて「砵」の前を着流しで舞い、後を袴で舞う、ということもしました。面や装束を付けずに舞う舞囃子では能以上に一般の方にはストーリーがわかりづらいので、山本東次郎先生にお願いして、舞囃子の間で紋付き袴で間狂言の素語りをして頂くという、滅多にない企画も致しました。

「能の囃子の魅力」と題して囃子のレクチャーをした後、太鼓・大鼓・小鼓の一調を並べ、ここでもまた他では聴けない「班女」の一謡一管を師匠にお願いし、最後には乱囃子のおまけ付きという贅沢な企画もしました。次々と自分の中に浮かんでくる『自分が観たくなる』会を企画し、その気持ちのままに会を重ねてきました。そして、「こころみの会」の第五回を企画するに当たって、途方もないことを思い立ってしまったのです。

その頃、師匠である梅若六郎先生の能は追っかけのようにして拝見していましたが、一方で喜多流の友枝昭世先生の能も大好きでよく拝見していた私は、「三番目の能を六郎師の地謡で友枝師に舞っていたかどうか」とはできないものか」と思っていました。実現は難しいかなと感じていたところに、私が思っているような企画での「半部」が「橋の会」で催されました。又、山形の梅若会の催しでお二人の「蟬丸」も舞台に実現したのです。「このタイミングを逃してはなるまじ…」と、私はお二人の先生に直接お願いすることにしました。

「こころみの会」ではまだ能をお願いするのは無理があったので、謡も舞もたつぷりお客様に楽しんで頂ける「江口」の舞囃子をお願いしたところ、両先生とも快く受けてくださいました。『自分が観たくなる』これ以上のものはありません。けれども『女性の能を考える』という部分での企画を、お客様に「こんなの観たくなかった」と思われては、会の魅力が半減して

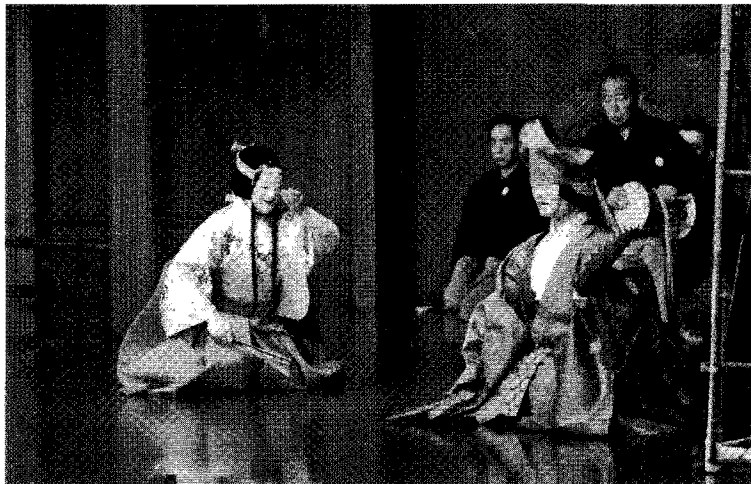
しまいます。テーマは「流儀を越えて」です。いろいろ考えているとき、ある先生に「喜多流に一人だけ女流能楽師がいてとても上手いよ」と聞きました。それが大島衣恵さんだったのです。舞台も拝見したことはなく勿論面識もありません。東京では殆ど舞われる機会がないとも聞きました。せつかくの異流共演だから女性の方も、お客様に楽しんで頂けるよう、「同じ曲を観世流と喜多流ではどう舞うかという比較で仕舞を並べる」のならいいかもしれないと思い、舞台の方角の設定の違いや写実的な型を比較しやすい「清経クセ」を選び、友枝先生にお許しを得て衣恵さんにお願いました。お客様も中には喜多流に女性能楽師がいることを知らないかたもあるはず、きつと「こころみの会」らしくなると思ったのです。

当日は会場まって以来の大入り満員でした。立ち見も出るほどの盛況！「江口」を考えれば当たり前といえば当たり前なのですが、『自分が観たくなる』というコンセプトなのに「自分は見所で観られない」ということにジレンマを感じた会でもありました。舞囃子の方は文句なく皆様に喜んで頂けました。心配していた私と衣恵さんの立ち会いの仕舞も、同じ曲ということで舞う方も地謡の先生方にも緊張感があり、面白く観て頂けたようでした。思った通り、「喜多流に女性能楽師がいるとは知らなかった」とか「流儀の違いがよくわかって面白かった」という評を頂けました。そして「衣恵さんの舞をまた観たい」という方もたくさんいらっしやいました。これが「こころみの会」での衣恵さんと私のご縁の始まりです。

その後、花伝書の「年来稽古条々」を女性版として、年代ごとに舞囃子を並べ、女性能楽師の年齢を重ねていく上での稽古のあり方を考える会、「武将を愛した女たち」のテーマで舞囃子と能(こころみの会での初めての能・二人静)の番組を組んで、静岡前や巴御前の凜とした生き方に女性能楽師を重ねて考える会を企画しました。その中で衣恵さんだけでなく鶴澤久さんや光さんにも出演して頂くようになり、舞囃子を舞って頂いたり、また女性で地謡を謡うことにも比重を増やしていきました。

他にも女性にとつての謡の発声を求めることからはじめた「声の道場」という和のボイストレーニングの延長で『日本の声』と題して山本東次郎先生に復曲の独り狂言「東西迷」（東西はく）を演じて頂いたり、「形見に想う」というテーマで梅若晋矢(現・紀彰)先生に袴能「井筒」を舞って頂き地謡を女性で謡わせて頂く、ということもしました。もちろん衣恵さんにもテーマにそって舞囃子を舞って頂いたわけですが、流儀の違いがあるのでご一緒の舞台を勤めることはできません。また、私の「向こう見ず」が始まります。

第五回が終わった後、いろいろな企画で衣恵さんと光さんを見るたびに、私の中でこのお二人の「蟬丸」を観てみたいと思いつくようになってきました。第十回を迎えるに当たっては、それしか考えられなくなっていました。



こころみの会 能「蟬丸」 シテ 大島衣恵 シテツレ 鶴沢 光
(2012.4.28) 梅若能楽学院 池上嘉治 撮影

いろいろな方から「あの方達と一緒に舞うとあなたが目立たないから損じゃない？」と言われたり、「自分の会だからシテを舞えばいいのに」と言われることがあったのですが、そのたびに「私のための会ではなく女性能楽師を考える会だから」「私の能は私はあまり観たいと思わないから」と笑って返事していました。私中心の会をしていたら絶対こんなに続かなかったと思います。私が最初からあげている二つのコンセプトにピッタリはまるのが、このお二人による

「蟬丸」だったのです。これ以上の物は考えられない以上、この会に集中していったん「ころみの会」をストツプしよう。そういう気持ちで取り組んだのです。幸い、喜多流職分会のお許しも出しました。また異流共演ということで、梅若玄祥先生や、観世鐵之丞先生が間に入ってくださいと、観世宗家のご許可もいただきました。御宗家からは「大いにやりなさい。いい会にするように」というお言葉までいただきました。この上は他の演目もすべてにわたって、気持ちが一つになるような会にしなければと企画を練りました。

番組が出来上がり、今年に入って初めて全員が揃い稽古をしたときのこと、私は地謡の座にいて、目の前で衣恵さんと光さんの掛け合いを見て聞いているうちに、まだ稽古が始まったばかりだということに、知らず知らずのうちに涙が溢れてきてしまいました。「いけない、いけない、まだこれから…」

本当にたぐさんの先生方を巻き込んで、ご心

配をかけ、お稽古のお時間も取って頂きました。出演してくださいました諸先生方もとても協力してくださいました。周りの方の温かいご支援もたくさんあり、思った以上の成果を上げることができたのではないかと思います。

「いままで蟬丸は何回も謡ったし、能も何度も見たけれど、今回のようにドラマとして引き込まれたのは初めてだった」「女性の能という違和感はまったくなかった」というようなお客様からの感想も頂きました。もしかしたら、プロになって最初に師匠に言われた「男性の真似でなく、女性がやったからこそ」という能ができたのかもしれない。謡も舞も基本をしつかり積んできた衣恵さんと光さんの逆髪・蟬丸だからこそ、また久さんはじめ子供の頃から能を体験していらした女性能楽師の三先生に率いて頂き、それに必死でついて行こうとした地謡だったからこそ、お客様にそう感じて頂けたのではないかと思います。十回目にしてやっと『ころみの会に花が咲いた』そういう気がしています。これからまたその『実』を結ぶようそれぞれが努力していかなければならないとも…。

会当日、後見にいらして頂いていた鐵之丞先生に、最初からお稽古やお装束のことなどとてもお骨折りました。だったので「お陰様で、今日を迎えることができました」と、ご挨拶をしたときのこと、静かな声で「まだ終わっていませんよ」とおっしゃいました。「ああ、私はまだ本当の能楽師ではないな。観客の気分が抜けていない」と改めて反省。また、これまでにい

たる稽古を通じて子供の頃から能の世界で修行している方達との、芯の違い(心身共に)も強く感じました。これはどんなに努力しても私には身に付かない無理な部分だと思えます。けれども私には、「おとなになってから何もわからないところから始めた」ということがプラスになつているところが沢山あります。観客の目が私になかつたら「ころみの会」は成功しなかつたと思います。またこのところ展開している「声の道場」で一般の方に、能の力の理論で教えることは難しかったと思えます。舞台での表現だけでなく、能の素晴らしさを伝え広めるのにはその立場によりいろいろなやり方があるのではないかと、強く感じています。

衣恵さんは私の著書「声の道場」を読んで、ご自分がお教えになるのにも役に立つと賛同してくださいました。私にとつてはとても力強い応援です。これからもまた一緒に舞台を作り上げていく機会を持てたいいなと思っております。

最後に私の好きな言葉

「なりゆきを決然と生きる」

玄術宗久さんがテレビで話されていた言葉

「面白きこともなき世を面白く

すみなすものは心なりけり」

高杉晋作の辞世の句

こういう気持ちで、また先に進んでいきます。

能装束ワークショップ2012

主催 シアター能楽



左より2番目 モニカ・ペーテ 3番目 筆者

ジョン・オグルビー
(John Oglevee)

(Theatre Nohgaku Blog 参照)

ジョン・オグルビー氏

1970年、アメリカ生まれ。

俳優、パフォーマー、ミュージシャン。

シアター能楽の設立者の1人。

坂手洋二劇団“燐光群”団員。

1991年、ニューヨーク大学 西洋演劇 BFA取得。

2009年、ハワイ大学 アジア演劇 MFAを取得。

東京在住。

六月十三日(水)〜十五日(金) 京都にて

・モニカ・ペーテ女史の能装束、

織物レクチャー

・佐々木能装束 見学

私は十五年程前にリチャード・エマート氏に出会って以来、シアター能楽の一員として能楽に携わっている。この間、演者が身に着ける能装束を大変美しいと思いつけてきたし、素晴らしい洗練され優雅で気品のある装束であると賞賛してきた。

能楽の実技、舞や謡、囃子等を学ぶ内、もっと能装束について深く学びたいと思いつけ、今回シアター能楽のメンバーや一般からの応募も受け、十一名のメンバーで能装束ワークショップを実施することが出来た。

「能装束ワークショップ」初日、六月十三日、能装束研究家のモニカ・ペーテ女史から能装束の専門的な知識を学んだ。彼女の能装束への知識は広く深く、装束が純然たる芸術性を持って製作されていることを学び、謙虚な気持ちにならざるを得なかった。

機織りの基本的な学習のために、モニカ女史はボール紙で手作りの小さな機織り機を作ってくれていて、私たちは実際にどのような仕組みで機織りがなされているか学習することが出来た。また、フランス人によって開発されたパンチカードシステムの機織り機を一八〇〇年代後

半、日本人が改良したジャガード織りを実際に織って見せてくれた。

我々は次に、能装束製造専門店「佐々木能衣装」を見学した。私は数年前、英語能「バゴダ」の衣装注文のため大島輝久、衣恵師とともに一度訪れたことがあった。

唐織の技術の多くは数百年前、中国からもたらされているのだが、能装束に使用される織物は中国船から積み下ろされ、新品のまま倉庫に置かれているのではないのだ。能装束のほとんどが注文を受けてから製作される。現在はその無知を恥じているが、それまでは、店頭で注文に応じられるように装束用の反物の在庫があるのは当然のこと思っていた。

佐々木能衣装の作業場にはたくさん織機があり、注文を受けあらゆる布地を織っていくだけでなく、糸練りから絹糸の染色までするのである。それは事実コンピュータ発明の着想の源となった芸術的アナログシステムの信じられないほどの精密な過程である。佐々木能衣装の作業場に足を踏み入れることは、何百年前の時代に足を踏み入れて行くような感じがする。職人が何世紀にも渡って培ってきた伝統技術を使用するのを目にし、ただ単に木製機械の無限の空間に感激しただけでなく、職人がそれを巧みに操作し、巨大な楽器のように動かしていることにも感激をした。器用な手足による凄まじい

ほどの動きから奏でられる音楽(織り物)は見事なものであった。それは私にコンサートでのパイプオルガン奏者を思い起こさせた。私はその場所に立ちつくして言葉も出なかった。

私は以前から能装束に対して常に畏敬の念を抱いて来たが、織物、縫箔、金箔、ジャガード機による織物技術、刺繍、規則配列、意匠圖案、裁断と縫製、浅浮き彫りの彫刻など今回のワークショップで能楽という芸術の持つ驚異の世界へますます深く引き込まれ、ウサギの巣穴に真つ逆さまに落ち込んだ気持だ。

六月十六日(土) 京都から一路、福山へ。

- ・大島能楽堂で能装束着付け基本レクチャー。
- ・定期公演の前日申合せを見学。

六月十七日(日)

- ・大島能楽堂定期公演を鑑賞。

能 「百」 シテ 大島政允

子方 大島薫子

狂言「雁 磔」シテ 茂山千五郎

能 「葵 上」シテ 大島衣恵

六月十八日(月) 十九日(火)

- ・能装束着付け実習。互いに装束を付ける。

大島能楽堂稽古場にて

今回の能装束ワークショップはシアター能楽のメンバーにとって測り知れないほどの教育的な成功がもたらされた。織物や装束についての学びは参加者全員が楽しんだと確信している。

後になって考えてみれば今回のワークショップほど楽しいものはなかった。本当に残念なのはもつと多くの会員とその楽しさを共有できなかったことである。

このワークショップのオーガナイザー、シアター能楽メンバーのトム、ジョイス、リック、そしてモニカ・ベータ女史に感謝し、装束着付け指導に当たっていただいた長田驥先生と御子息に敬意を表したい。快くワークショップのホスト役を引き受けていただいた喜多流大島家の皆様、本当にマハロ(有難う、ハワイ語)ゴザイマシタ。

また、宿泊した福山のベネフィットホテルの陽気なスタッフの親切も忘れられない。私たちの滞在をより楽しく想い出深いものにしたという熱意に溢れた態度にも感激をした。

(原文英語 翻訳：寺田良二 文責：大島泰子)



“高砂やゝ”から “英語能パゴダ”へ

東京大島会会員

釜 衣代

クラシック音楽一辺倒だった主人、釜三夫が能の世界にどっぷりはまる事になったのは武生（石川県）であった。友人の結婚披露宴がきっかけでした。まだ二十代後半、八幡製鉄（現・新日鉄）東京研究所に勤めはじめてまだ二〜三年の頃だったと思います。

高校時代は学校の聖歌隊、大学では男性合唱団の指揮者をしていました。当時を知る友人達にとって「能楽？つてなに!」という感じでしょうか。

その披露宴で扇一本で謡う方達に出会い、自分も「高砂やゝ」位は覚えたいなあと思ったそうです。たまたま上司の荒川様（福岡周斉先生のお弟子で地拍子等も研究していらっしやった方です）から「高砂やゝ」



前列左端 筆者 左より3番目 釜三夫 (2007.8.3) Noh Training Project

だけ教わるつもりがこの道への第一歩です。

その後、私自身も能楽に興味を持ち、というか持たざるを得ない状況になり、訳もわからず能を見に行くはめになったのです。荒川様の御息の研ちゃんの御紹介で私は政允先生にお仕舞を習いはじめました。

主人は荒川先生が亡くなられるまでお謡をお習いしていました。囃子に興味を持ち、政允先生の御紹介で亀井俊一先生に小鼓をお習いすることになったのです。福岡先生つながりでR・エマートさんとも知りあい、あれよあれよという間にますます深みにはまって行き、亀井忠雄先生に大鼓をお習いし、エマートさんとの英語能を何度かお相手し、そのうち、アメリカブルームズバーグでのワークショップにも参加する事になりました。主人はブルームズバーグのワークショップを毎年大変楽しみにしていました。日本語もほとんど出来ない人達が日本語のテキストで謡・舞・囃子を習い、とにかく三週間のプログラムで何とか形にするのですから、生徒さん達の意気込みが違います。そういう熱い人達が大好きでしたから……。

主人の最後の演能は「英語能バゴダ」のヨーロッパ公演でした。お能の世界への入り口でお世話になった大島先生と一緒最後の舞台を勤める事が出来たのも、不思議なご縁と感じます。

私もこの夏、ブルームズバーグで衣恵さんと一緒に、楽しく有意義な時間が持てました。

まだまだ知らない事が沢山あり、能楽の奥の深さをつくづく感じています。そして今秋より衣恵さんに囃子謡をお習いすることになり、私が能の世界にはじめて出会った頃にお産れになったあの衣恵ちゃんに教えていただけるなんて、こんな幸せはございません。大島家との深いご縁に感謝いたしております。



英語能「バゴダ」初演にむけて (2009.11.28) ロンドン大学キャンパス
小鼓 釜三夫

釜三夫氏、二〇一二年二月十四日に死去。
永年、シスター能楽会員への能囃子指導に
尽力なさいました。享年七十四才。



蝶の会 能「二人静」シテ 大島輝久 シテツレ 友枝真也 (2012.4.21) 東京喜多能楽堂 池上嘉治 撮影



能「楊貴妃」シテ 大島衣恵 (2012.4.15) 大島能楽堂
池上嘉治 撮影



能「百万」シテ大島政允 子方大島薫子 (2012.6.17) 大島能楽堂
Photo by David Surtasky



能「葵上」シテ大島衣恵 (2012.6.17) 大島能楽堂 Photo by David Surtasky

演能ご案内

2012年

開催日	催し名	開演	会場	鑑賞料	演目
9月16日(日)	第230回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「土車」 金子匡一 狂言「伯母ヶ酒」 茂山千三郎 能「羽衣」 大島輝久
9月23日(日)	喜多流職分自主公演	11:45	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「融」 大島政允
10月21日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
10月26日(金)	繪 処 能	19:00	繪処アラン・ウエスト	5,000円	能舞「枕慈童」 大島衣恵
10月27日(土)	義仲・巴能楽公演	17:00	木曾文化公園文化ホール	2,000円	能「巴」 大島衣恵
11月 3日(祝)	後 楽 能 1部 2部	10:00 14:00	岡山後楽園能舞台	一般券 3,000円	能「井筒」 仕舞・独調等 能「黒塚」 大島衣恵
11月 6日(火)	はじめての能楽大会	13:00	岡山後楽園能舞台	無料	能学習発表・鑑賞会 能舞「田村」
11月18日(日)	第231回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	狂言「仏師」 茂山逸平 能「遊行柳」 大島政允

2013年 大島能舞台 創建100周年

1月 3日(木)	新 春 能 楽 祭	12:00	沼名前神社能舞台	無料	奉納
1月19日(土)	能 楽 は 楽 し い	13:30	アステールプラザ能舞台	700円	能学習発表・鑑賞会
1月20日(日)	喜多流新年初謡会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
2月24日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「雲林院」 大島政允
3月24日(日)	宗吉史跡まつり薪能	17:00	三豊市宗吉瓦窯	無料	未定
4月21日(日)	第232回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「玉井」 松井 彬 能「花月」 大島衣恵
5月19日(日)	喜多流春の会	10:00	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
6月 1日(土)	燦 の 会	13:00	東京喜多能楽堂	正面指定 8,000円他	能「国栖」 大島輝久
6月16日(日)	第233回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「籠太鼓」 大島政允 能「邯鄲」 大島輝久
7月28日(日)	福山八幡宮薪能	18:30	福山八幡宮	前売り券 4,000円	未定
9月15日(日)	第234回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「三輪」神遊 大島政允
9月22日(日)	喜多流職分自主公演	12:00	東京喜多能楽堂	一般券 6,000円	能「養老」 大島輝久
10月20日(日)	福山総合文化祭 秋の会	10:30	喜多流大島能楽堂	無料	仕舞・素謡
11月17日(日)	第235回 大島能楽堂定期公演	12:30	喜多流大島能楽堂	年間共通券 20,000円 一般券 6,000円 学生券 2,000円	能「景清」 金子匡一 能「葛城」 大島衣恵
12月22日(日)	大島能舞台 創建100周年記念能	12:30	喜多流大島能楽堂	未定	能「木賊」 大島政允 能「石橋」 塩津哲生 大島輝久

編集デスクより

- ・「僕のお能を見てくれる人がいるのかな」この道を継ぐと決意した20数年前の長男輝久の言葉。友枝真也氏、佐々木多門氏と共に立ち上げた“燦の会”、東京の喜多能楽堂に補助席も出る盛況ぶりに深謝です。
- ・山村庸子氏主催の“こころみの会”、会場のお客様の暖かい応援が心に響く本当に嬉しい会でした。観世鏡之丞先生・梅若玄祥先生・友枝昭世先生には色々とお無理を申し上げ大変お世話になりました。
- ・猛暑の中、福山八幡宮、光信寺での薪能には大勢お出かけ下さり、誠に有難うございました。子方の藤井愛冬君と9人の稚児達(孫2人も薪能初デビュー)暑い中みんな良く頑張りましたね。地謡で頑張った藤井君のお兄ちゃん、立派でしたよ。(大島泰子)

